金子大榮先生の御面影―如是我聞―

西　元　宗　助

(一)

ただ今、過分なご紹介の言葉を賜わりました西元でございます。本来なれば、この講演は、金子先生の一番弟子のお一人であられる寺田正勝先生がなされる筈でありましたのを、先生が多少健康を害せられましたため、このように私が述べさせていただくことになったと承っております。それからまた、本日は五十数年前の学生時代から親しく尊敬申しあげてまいりました山田亮賢先生が安城からわざわざお見えになっておられます。山田先生のお姿を拝していますと、今、ご郷里でご静養中の松原祐善先生のことなども想われ、学生時代、ともに曾我先生・金子先生のみ教を仰いだよき日々のことを想い出すことでございます。

それでは、さっそく、金子大榮先生のご恩徳を謝するために、しばらく拙い話をお聞き願うことにいたします。

まず最初にわたし自身の立場を、多少の自己紹介を含めて、申し述べることにさせていただきます。今日ご参席の諸先生がたの多くの方々がご僧侶で、しかも仏教学あるいは真宗学の学者乃至学徒でおありになるに対し、私は先ほどご紹介いただきましたように在家の者で、しかも仏教学者でも真宗学者でもありません。教育学を専攻してきた一信者であるにすぎません。それに私は先祖からのお西の門徒なんです。と申しますのは、私の先祖は薩摩のいわゆる

〃かくれ念仏〃にご縁があるのでございます。もっとも〃かくれ念仏〃という言葉は、妥当ではありません。なにぶん、徳川家の宗旨は浄土宗なのですから、薩摩藩においても浄土宗は大切にされて浄土宗のお寺はあったわけです。だからお念仏が、禁じられていたのではない。浄土真宗の門徒であることが禁じられていた、というのが真相であります。いわゆる一向宗禁制であったのでございます。

――あっ、椅子はいりません。――これも一言申し上げておきます。私どもの先生、西田幾多郎先生も田辺元先生も和辻哲郎先生も、一度も椅子に腰かけて講義されたことはございません。いっぺんだけ、朝永三十郎先生が、ノーベル賞をもらわれた朝永先生のお父さまの朝永三十郎先生が椅子に腰かけて、「今日は熱が三十七度一、二分あるので、腰かけて講義することを許してほしい」と。このお言葉に私達は本当に心うたれました。先生方は命がけであられるなと。

さて話を元にもどしまして、ともかく私は昭和四年春に、旧制の第七高等学校を卒業して、京大の哲学科に入学することになりました。そのため母方の爺さんの家に挨拶に参りますと、爺さんが、わたしに一通の手紙を渡し、この手紙を西本願寺の宗務総長に直接、渡すようにというのです。この爺さんは当時、鹿児島の西別院の門徒総代でありました。一応、手紙を読んでから封をせよと、それで読んでみますと、今も覚えております。近ごろの御輪番、輪番さまは、金を集めることに苦労しておられる。これは、われら門徒が悪いからで、金を集めるようなことは、自分が生きておる間は、責任を持つ。それで是非お願いしたいことは、これからは、青年の時代であるから特に仏教青年会の指導の出来るような方をよこしてほしいと。こういう内容でありました。それでその手紙をもって、京都駅に着き、いったん宿舎に落ち着きましてから、さっそく京都駅に近い本願寺さまに参りました。すると受付の方が、ここは、東本願寺やと言われました。西本願寺はとお尋ねすると、西の方やと言われ、ああ、そうやった、徳川家康の政策によって、本願寺は二つに分けられたなあと想い出しました。さあそこで、てくてくと歩いて、嘘みたいな本当の話で

あります。西を指して行ったら、東本願寺より、はるかに小さいお寺があって、そこへ行って、受付に、ここは西本願寺ですわねと、尋ねますと、いや違います。ここは興正寺のご本山です。西本願寺は北隣です。それで、ようやく西本願寺のご本山に辿りついて安心したのでありました。その頃から私は思いました。こんな新しい時代になっても、本願寺が二つに分かれている。これはいけない。どうしたらお東とお西とが合併できるかと、真剣に考えはじめたのです。じじつ鹿児島出身のわれわれには本来、西も東もないのです。わたしの親族の者は、先も申しましたように、みな、お西の門徒でありますが、その多くが昨年の秋、松任（まつとう）の北安田で三十三回忌の御法要の厳修されました暁烏敏（はや）先生のご教化感化をこうむったのでございます。それほど先生は鹿児島にしばしば足を運ばれ、わたしの伯母の家にご滞在いただいたのでありました。そして先に申しました私の爺さんも、仏法聴聞にはお西もお東もない、ご開山さまのお流れを、ほんとうにいただくことが肝要と。まあ、こういうようなことなんでありました。

さてこれから本日の主題に入ってまいります。先に申したように、私は昭和四年の四月に京大に入ったのですが、実はその前年の三年六月に、いわゆる、〝異安心〟という名目のもとに、わが金子大榮先生が僧籍を剝奪され、そして大谷大学の教授を辞職されるという事件が起こりました。私ども在家の者にとりましては、僧籍剝奪なんていうことは、なんでもないのでありますが、これは大変なことで、徳川時代ですと、生きる道を失うことであったようでして、勿論、金子先生の場合は、現代のことですから、それほどのことはなかったとしましても、後で申しあげますように案外、大変なことだったのであります。それで当時の各新聞にも大きく取りあげられた。わたしの入学しました京大の哲学科の先生がたにも、大きなショックであったようです。その証拠に、哲学の田辺元先生も宗教学の波多野精一先生も、お話のはしはしに、このことに言及されて、金子先生のような、真に求道的にして誠実な学者の方が、このような処分をうけるとは、まことに心外と仰せになったのでありました。

当時、わたしは京大入学と共に京大仏教青年会の会員となっていたのですが、この時代はマルキシズムの学生運動

の盛んな時代でありますと共に、案外、宗教のリバイバル運動と申しますか、キリスト教も仏教もですね、信仰運動が熱烈に起こっておりました。つまり、この昭和四年（一九二九）という年は、世界的な経済恐慌の年で、わが国も不景気のドン底。そのため飢え死にする者が、本当にあった時代であります。ご来場の若い学生諸君は、ひょっとしたら、乞食の姿、見られたことないのでありませんか。私たちの学生時代には、どこでもその姿をみることが出来たのです。本当に飢え死にする者がいたのです。東北地方では、女の子の身売りが現に行なわれていたんです。それだけに社会主義運動に身を投ずる真摯な学生も沢山いましたが、またこのような時代の苦悩から、求道的な猛烈な信仰運動も起こってまいりましたのです。その一つがわれわれの京大仏教青年会を中心として、それに大谷大学、龍谷大学の学生諸君も一体になって参加した〝学生親鸞会〟という信仰運動でありました。この運動は、やがて当時大谷大学の教授であられたドイツ語の池山栄吉先生――先生は近角常観師の友人でもある真の念仏者でおありでしたが、この池山先生によって、この運動は信仰の団体として正しい方向に向っていくことになるのですが、それでも学生の信仰運動ですので多少のゆきすぎ――脱線はございました。

そして私も、その渦中にいたわけですが、しかし、私にはどこか満足できない、心のみたされないものがありました。と言いますのは、先にも述べましたように当時、マルクス運動が盛んで、これらの熱心な社会主義運動をする友人たちから、「西元、自分だけ救われて極楽浄土へいって満足か。」と言うんです。「俺たちはナ、貧しいもの虐げられているもの――無産階級のものが真に救われて人間らしい生活の出来る社会をつくるためには、場合によっては死刑にされても仕方がないと思っているんだ。それであるのにお前たちは、なんだ。やっぱり、宗教は自己陶酔のアヘンじゃないか」と。

そんなことで、信仰運動に夢中になれない私がありました。その時、はからずも私がお遇いいたしましたのが、足利浄圓という先生です。この足利先生は、これから申しあげます金子大榮先生と深いご縁のあられる先生でして、も

ともと西本願寺の名門の出でおありです。おじいさんは、足利義山という西本願寺きっての和上（わじょう）さん。ところが、足利浄圓先生は、お年、三十すぎに、西本願寺の僧籍を自ら返還されます。理由は教団内部においても部落差別があると。しかも教団は、なんにもしない。これは親鸞聖人のご精神に反すると、ともかく、このようなことで寺を出てしまって大正十年のころに印刷屋―同朋舎を始めます。ところでその翌年の大正十一年に、全国水平社が結成される。あの時の印刷ビラ、どこの印刷屋も引き受けませんから、足利先生の同朋舎が引き受け、そのため警察に呼び出される。このことは部落解放運動の書物の中にも記載されています。

この足利浄圓先生にお遇いすることのできましたことは、わが生涯の喜びであります。先生はほんとうに寂かな方で、印刷機械の騒音の中でも端然として坐しておられる。そしてお念仏申される。わたしは一目お会いするなり、先生に深くひきつけられました。そして先生の同朋舎に時折、お伺いしているうちに、「静坐」ということを教えられて、やがて小林信子女史の静坐社にも通うことになるのですが、ここでは約五十分静坐したあとで、ご法話が聞けるのです。ここで私は、足利先生以外に、蜂屋賢喜代先生、岩見護先生、山辺習学先生、それにある日曜日には、金子大栄先生もお見えであったのでございます。

そのお姿は、少し前かがみながら端然として、それこそ深い湖のような感じがすると言いますか、あるいは深山の老樹のような感じがするというべきでしょうか、ともかく深く心うたれました。その前の年の昭和三年の六月、僧籍を剝奪され、大谷大学教授も辞された先生が、今、ここに静かに坐っておられる。そのお姿を見まして、「はあっ」と思いました。それで私、さっそく疏水のほとりの、当時の金子先生のお宅にお伺いいたしました。そうしますと、先生、丁重にお迎えくださったのですが、先生のくりかえし仰せくださったことは、仏法の世界は果てしなく深い、ともかく一筋に真実を求めて聞思学道するようにとのことでありまして、一言も世俗のことに触れられない。これにも驚いたです。

さて、その翌年の昭和五年の秋になりまして、当時の私どもの仲間、京大医学部学生の川畑愛義（京大名誉教授）龍大生の宮地廓慧（京都女子大名誉教授）同じく龍大生の長谷顕性（現在は大谷派住職）等の諸君と共に私たちは鹿ケ谷（ししがたに）に一軒の家を借り、「学道舎」の看板をかかげて勉学していたのでございます。ところで私どもの住居の近くの疏水のほとりに、たまたま興法学園が創設されたのでありました。

その興法学園というのは当時、大谷大学を辞職された曾我量深、金子大栄の両先生を慕って集まられた谷大生の学舎でありまして、ここに安田亀治氏、あとで理深と改名された安田さんや松原祐善氏、その他、数名の方がおられ、この興法学園で、曾我・金子両先生の講座がひらかれることになったのであります。

ところがです、今申しました、安田さん、松原さん、この方々にお会いしますと、圧倒されるものがあるのです。ものすごい迫力がおありで、それに安田さんら、一週間も風呂に入っとらん、そんな暇はないというのです。いや、本当に、そういう気迫がおありでした。それはともかくも、私は、その興法学園の会合、講座に時間のゆるす限り加えていただきました。そのある時です。金子先生のご講義がありまして、そのあと、何か質問ありませんかとの仰せ、ところでだれも質問しない。それで私、質問のための質問をしたんです。それは「無縁の慈悲」とは、どういうことですかと。私は、仏教の言葉を知らないもんですから、ごく簡単な気持ちで、質問しただけなんですが、金子先生は本当に真面目に受け取られまして、丁寧に綿密に懇（こん）々とお答えくださるんです。十分、十五分とたちました。そして先生、一息つかれておわかりになったでしょうかと仰せになったのですが、じつは却って難しくなって、ハイとお答えできなかったのです、そのときです。金子先生の隣に座っておられた曾我量深先生が俄かに上体を乗り出すようにされ乍ら、「無縁の慈悲とは、無縁の大慈悲とは、ナンマンダブツということでございます」と吃りながら仰せになった。すると金子先生が、曾我先生に向って低く頭をおさげになったのです。そのお姿に、あっと驚いた。私達は、曾我・金子両先生に向って畳に頭をすりつけるようにして、ナンマンダブツ、ナンマンダブツとお念仏申したことで

ありました。あとで松原さん言いました。西元さん、今日は、よかったなあ。君はよい質問をしてくれたと。

さて話は飛びますが、大学卒業後、約十年しまして私は満州(現在の中国東北地区)の建国大学という新設の大学の助教授となって赴任します。教授はあとで大谷大学にも一時席をおかれました福島政雄博士。先生はもともと故近角常観師の愛弟子でおありで熱心な仏教徒、そして教育学の学問の上でも、わたしの生涯の師でありました。その福島先生が発議されて、昭和十八年の六月と九月と二回、一週間の金子先生の仏教学の集中講義が行われたのであります。そのときは文学部の学生も教官も皆、こぞって聴講したのでして、非常に感銘の深いものがございました。ことに私は大学から先生の接待役を仰せつかったものですから、先生の声咳に接する機会が多くて幸せでありました。

これから、いよいよ先生の〝異安心事件〟に移らねばなりませんが、その先に、もう一つ申し上げておきたい、個人的なことがございます。それはですね、私は日本の敗戦後、シベリアで、足かけ五ヶ年間、捕虜生活をいたしまして、昭和二十四年の暮、日本に帰ります。そうしまして、その年の暮、当時、金子先生のお宅は、下鴨の蕪庵の筋向いにありましたが、そこに、お伺いいたしました。先生、喜んでお迎えくださって、「よう帰ってきた、さぞご苦労なさったことでしょう」と、ねぎらってくださりながら、最後に、「いま、どんなことをお感じですか」と、お尋ねになるものですから、この私、いささか得意になって、親鸞聖人仰せのように、まったく「浄土真宗に帰すれども　真実の心はありがたし　虚仮不実のわが身にて　清浄の心もさらになし。」と、申しあげますと、じっと聞いておられた先生はですね、しばらく聞思なさりながら、親鸞聖人であればこそ、「浄土真宗に帰すれども真実の心はありがたし」と。しかし、この金子は、浄土真宗の教えを聞かなければ、もっと端的にいえば仏法に遇わなければ、凡夫ということにすら気がつかないものでありました。まことにこの金子は、お寺に生まれさせていただき、浄土真宗に帰したおかげで「真実の心はありがたし　虚仮不実のわが身にて　清浄の心もさらになし」と、ようやく気づかせていただいたものでございますと、このときのわたしの慚愧と言いますか、衝撃はですね、なんともいえぬものでありまし

た。

さらに先生はあらたまった口調で仰せになりました。「西元さんは、もうすでに、信心いただいていて、つまり、自信して日本の国へ帰ってこられた。これからは教人信のために活動すると、そういうお気持ちであるのではありませんか。その点、金子はちがいます。この金子は、さっき言いましたようにお寺に生まれさしていただき、真実の仏法に遇うたご恩があります。それにこれからの日本は大変なんです。よって生涯かけて一切苦悩の群生海が救われんがため、それこそ教人信のために、今後の生涯をかけて、どこまでも聞思し自信させていただく、すなわち私においては、自信のほかに教人信の道はございませんと。このお言葉はシベリアから帰った昭和二十四年秋以降の、私のその後の生き方を方向づけることになったのでございます。

ところで忘れないさきに、学内掲示板の金子先生の「大榮」の榮という字が略字の栄となっていますが、このことがちょっと気になりますので、ひとこと申しあげておきます。先生は、親からつけてもらわれた大榮というお名前の文字をたいへん大事にされたようでして、だから先生ご自身は、どんなにお忙しい時でも、榮を略字でお書きになることはなかった。そのことは先生のお家（うち）の方から教えられて知ったことですが、榮の字の「宀」の中の木はご自分。すなわち煩悩の薪のご自分といただかれたのです。そしてその煩悩の薪の自分が、本願念仏のご信心の火によって生涯燃えつくしていただくのであると、ひそかに慶ばれたのでありました。そのことをご参考までに申し添えさせていただきます。

(二)

いよいよこれから、あの昭和三年六月における先生のいわゆる〝異安心〟とされた、あの問題に入っていこうと存じます。

私が何故に、この問題に特別な関心をもってきたかと申しますと、皆様はご存じないかもしれませんが、現在のお西の真面目な誠実なお寺様がたは、概して曾我・金子両先生、特に金子先生のお書物をよく読んでおられるのであります。それにです。現代の浄土真宗に関する全集といえば、殆んどそのすべてが暁烏先生や曾我、金子両先生のもの、又はその系統の先生がたのものであって、西本願寺系統のものは、残念ながらほとんど出ていない。

いったい、どうしてこうなったのであるか。この問題の由って来るところを考えてみますと、その根源は徳川時代における、お西のかの三業惑乱という問題にまでいくようです。だいたい、当時の西本願寺の教学の最高権威者は能化といってただお一人、それだけに絶大な権力をも持っていたのですが、その第六代の能化職が功存、ついでその弟子の智洞がそのあとをついで第七代能化となるのです。ところが、功存、智洞の両師が、「衆生が救われるためには、身口意の三業に帰命の心をあらわして、み仏に向って助け給へと願い求めなければならぬ」と強く主張したために――それは当時の無帰命安心を戒めるためでもあったのですが――それに対し在野の学匠たる大瀛師等がそれは異安心と非難し、それに本山内部の宗政上の抗争も加わって暴動化してつい収拾がつかなくなったのです。それに幕府がこの問題に介入し、結局幕府の裁判によって智洞及びその一派はことごとく文化三年（一八〇六）に処罰され、なかにも智洞師は毒殺されたとも伝えられています。そのため、お西の教学はその後、どうなったかといいますと、〃安心〃の型が出来てしまったのです。そして〃異安心〃という言葉に神経質になった。じじつ、異安心と断定されたならば、宗門からの追放となるのですから大変なこと、しかしそれは、お東も同様であったのであります。ただお西の場合の不幸は、宗門自身が「安心」の是非を裁定したのではなく、こともあろうに幕府が裁判し、それを宗門が追認したところに根本的な致命的な問題があったと、このように私どもは見ているのであります。

それだけにお東における、金子大榮先生のいわゆる〃異安心事件〃の経過及び処理とその結末は、殊に金子先生のご人格と信心によりまして、全く対照的である――勿論、時代も条件も異るとは申せ――対照的であることが反省さ

せられるのであります。いや、それだけではありません。この事件によって、却って現代における真宗教学の基礎が確立することになったと申しても過言ではないのでありましょう。

それでは先ず、昭和三年六月の問題の発端となった金子先生の『浄土の観念』という書物について触れなければなりません。ひとくちにいえば、あの『浄土の観念』という書物の「観念」という言葉が誤解又は曲解されたことに因るのであります。しかしそれに対して、先生は決して相手を責めず、ひたすら慚愧の念をもって自己の所信を披瀝されたのでありました。それを昭和三年六月十五日の『中外日報』紙上の先生の声明文の一部をここに紹介・読みあげることによって、ご理解願うことにいたしたいと存じます。

「このたび、私の著書が測らずも宗門内の物議を生じ、為に一方ならず師友諸賢に御心配をかけましたことは、誠に恐縮に堪へませぬ」と前置きして、自己の領解・所信を謙虚に陳述し、最後に「私は真宗学に志すこと二十余年、幸いに師友諸賢の御指導に依りて、その道を進めつつ今日に至りしこと感謝に堪へませぬ。かくして真実に教法を領受し、自他の救はるる道を聞くことが、以て仏祖の恩を報じ、また宗門百年の基礎に対して貢献する所以と信じて来ました。然るにその志半にして今日の問題を生じたること、師友諸賢に対して誠に慚愧に堪へぬことであります。併しまたその故に、この問題を解決するの道は、私としては更に精進して、研究を純にし、私の志を徹底するの外ないと思念せずには居られませぬ。云々」と。

ともかく、このように、先生は深く慚愧しつつも、どこまでも自己の所信を、明らかにしようとされた。要するに「自分は宗門のすくなからざる人々を怒らしめたことに就いて、責任を感じ、慚愧しなければならない。だいたい、道を求める者は、その道を求めることにおいて、いつのまにか、誇りの心がつきまとう。法を求むる者は、その法を求めるにおいて、いつのまにか自らを誇る。その誇る心が、まったく自分になかったとは言えない。自分は、知らず識らずのうちに驕慢となり、剛直に陥いっていたようで、まことにお恥ずかしいことである、」と受け取って、一層

〝聞思〟の道を歩んでいかれたのでありました。

ところがです。その昭和四年の暮の十一月には、先生のお父様が郷里高田のご自坊で亡くなられます。お寺さまであるお父様にとってですね、自分の後つぎ息子が〝異安心〟ということで〝僧籍を剝奪〟されたということが、どんなに堪えがたいことでおありであったか、それは想像を絶するものであられたに違いありません。それだけに、ご尊父の死が先生にとって、いかほどお辛くおありになったかは察するにかたくないのであります。しかもです、その数年後には、先生の御母堂もやはり、越後のご郷里で亡くなっておられるのでございます。

さてそれから、金子先生は、当時新設の広島文理科大学に仏教学の講師として迎えられることになり、そのため、昭和八年には広島に転居なさることになります。それは一に、当時の広島文理大学の吉田賢龍先生の招聘によるものでありました。しかし当時の国立大学においては、講師の待遇は甚だ悪く、その俸給は最低であったのであります。したがって、そのご生活は、大変であられたに違いない。現に広島において、先生はまず、昭和十二年の五月に、一枝夫人を亡くされております。それにです、谷大に復帰することになる昭和十七年の九月には次女のサチさんを、次いでその十月には次男の行栄さんを、このように次から次へと亡くしておられるのであります。先生は、このころのことをお書きになった『永遠と死』の中で、「昭和三年の谷大辞職前後のことは、自分の信念によるところでもありそれほどでもなかったが、しかし、それにつづく妻子の病死はさすがに身にこたえ、自分の宿業ということをしみじみと感じさせられました」と述べておられます。

わたしは、広島における先生のこの十年余のご生活のことを想いますと、つい涙がこぼれます。それで、あるとき思いきって、先生のご三男の宏（ひろし）さま――私どもの娘たちの高校時代の恩師でおありです――その宏先生に、広島のあの時代、たいへんでおありだったですね、――だいたい、あのころは、お家の方、みんな栄養失調ではなかったんですかと、お尋ねしますと、宏先生ただ顔を伏せたまま、でおありでした。しかし、宏先生は、しばらくして、「でも、

父は言うておりました。広島のあの十何年がなければ、自分はダメだったと。また父は、すべてのことをただ自分の業報として受けとめていたようでして、よくお念仏申しておりました。そして、あのころ、父は朝から夜おそくまで机に向ってひたすら、ただお聖教をよんでおりました。」と、そういえば、先生の名著『教行信証講読』四巻の執筆もあのころでおありであった。なお、広島の安芸門徒が言っております。広島にお迎えした金子先生は、ひとことも愚痴をこぼされなかったと。ご本山のことも、大谷大学のことについても、ひとことも恨みがましいことを言われなかった。「みな宿業のいたすところ」と仰せになられたと。

じつは、広島は私にとりましてもご縁の深いところでありまして、金子大榮先生を招かれました広島文理大の当時の学長吉田賢龍先生は、わたしの亡き父の友人であり、そして広島文理大には、あとで私が教育学のご指導を仰ぐ福島政雄先生、さらには藤秀璻先生もおられたのでありまして、これらの先生がたが金子先生を温く迎えられて交友を深められたのでありました。

なお金子先生の広島文理科大学――現在の広島大学――の学生への影響は大きく、その中から金治勇（四天王寺国際仏教大学名誉教授）岩本泰波（埼玉大学名誉教授）等の諸氏が出ていられることも、ここにご紹介申しあげておきます。

ところで先生は、はからずも昭和十五年に僧籍復帰、そして昭和十七年には大谷大学がふたたび曾我量深先生と共に先生を迎えるということになります。これは、今から考えれば当然のこと、いや、すこし遅きに失したともいえますが、非をあらためた御本山も大谷大学当局の態度も立派。しかし、このように本山をして、その態度をあらためさせたものこそ、まさに曾我・金子両先生の謙虚なお態度――ご信心であったと省みるものでございます。

何故に、わたしがこのことに深い関心をもつかと申しますと、さきほども申しあげましたように、お西――西本願寺の宗学には、徳川時代の末期において、三業惑乱という大事件があり、その禍根が今日もなお残存しているといえるかと思うからであります。ともかくお西では当時、二派に分かれて対立し、お互いに相手を非として罵り宗門をあ

げての騒動となりました。その点、金子先生は、先にも申しましたように、自己の所信は、どこまでも明らかに述べられはしましたが、相手を非難したり攻撃したりなさることはなかった。却って、そのような誤解――非難をうけることを、自己の宿業として慚愧されたのでありました。この点が根本的に異っておりました。わたしはそのことに深く感動するものであり、そして又、再び曾我・金子両先生を迎えた本山――宗政当局の態度も立派であったと敬意を表するものであります。

そうしまして、ここでもう一つ述べておきたいと思いますことは、金子先生は、昭和十六年から高野山大学に招かれてその講師になっておられることです。そしてこの高野山大学における先生の影響は今日でも案外、大きいのであります。じつは昭和二十七年から三十年間、わたしも高野山大学の夏季集中講義の講師をさせていただきましたのですが、あそこの学長でおありだった中野義照博士――原始仏教学の権威で、先年亡くなられましたが、その中野義照先生が、金子大栄先生のことを讃えられて、こんな素晴らしいお方はないと仰せになり、金子先生にきていただいたおかげで、われらは〝生きている仏教〟を学ぶことができたとも仰せになりました。現にですね、現在の高野山大学の学長の高木訥元先生――非常に敬虔な密教学者でおありですが、この先生もいはば金子先生のお弟子と申しあげてよい方であります。そう申せば、この高木先生、それからその前の学長さんの松長有慶先生が高野山大学の学生時代、これらの方々に、真言密教を極めよと激励したのが、なんと木村無相さんなのです。無相さんは当時、高野山大学学生課の一課員でありながら、なんとかして弘法大師の真言に生きようとして苦悶しておられたのでした。そして大学の宿直室を自分の書斎にしておられたのですが、そこに出入りしておられたのが松長、高木両先生達だったのであります。そしてこれは高木先生のあるときの回顧談ですが、その無相さんの書棚に列んでいたのが金子大榮先生のお書物で、そのころから無相さんは金子先生をお慕いするようになり、やがて高野山を下って真宗の教に帰するようになられるのであります。ところで無相さんは、晩年東本願寺の同朋会館、あそこの下足番を数年間しておられました。

このことが高野山の先生がたのお耳に入りまして、「困(こま)った、困った、いくらなんでも下足番とはひどい」とのことでした。わたしが無相さんをお訪ねして、そのことをお伝えすると、例のにこやかな調子で、念仏申されながら、すまん、すまん、でもこれほどの有難い修行はないと。そしてこの無相さんは、ときに下鴨の金子先生のお宅をお訪ねなさることが、晩年のいちばんの楽しみ、喜びでおありだったようで、そしてまた金子先生もお家の方々も、無相さんの訪ねてみえるのを大変、楽しみにしておられたようでございます。なお、『念仏詩抄』の著者でもある無相さんもまた昭和五十九年春、お浄土に往かれたのでございます。

さてあと二つ三つ。さっき申しましたように、私は昭和二十四年の暮に、シベリアから帰って京都に住むことになるのですが、その翌年の春のころから、私どもの仲間は、足利浄圓先生を中心に、先生の右京区山之内のお宅で、自照会を毎月ひらき、『自照』という月刊雑誌を出すことになります。その同人は、龍大の桐渓(きりたに)順忍、瓜生津隆雄、石田允之の教授の勧学(かんがく)さんたち、在家側は白井成充先生と井上善右衛門兄や私らが中心でしたが、この会の別格顧問が、なんと金子大榮先生でおありでして、前述の『自照』に毎月、特別寄稿いただくだけでなく、年二回の特別講座の講師にも足利先生のご希望によりまして、金子先生が必ずお加わりいただくことになっていました。それほどに足利先生は金子大榮先生を特別に尊敬しておられたのでありますが、しかしそれだけではありません。じつは金子先生の後半生、つねに先生の影のごとくに附き添うてこられた奥様、先生の後添いの奥様の安子夫人は、もともと、足利浄圓先生のお家にいた方なのでございます。

先に申し述べましたように金子先生が、広島で前の奥さまを亡くされた。それを見るに見かねて、足利先生の配慮によって、現在の京都女子大の前身である東山の京都女専を卒業したまま足利家に養女のように居ついておられた安子さまが、ご縁あって金子先生の令室になられたような次第でございます。そんなことで、金子先生が私たちの自照

会に来られますときは、安子夫人がいつも、いそいそと附き添うてこられたようなわけでして、金子大栄先生と足利浄円先生との交友関係は非常にこまやかでおありであり、したがって又、金子先生の思想と信仰は、浄円先生を通じまして、その後、西本願寺の教学の中心となられた先述の先生がたにも尠からず影響したであろうことは想像にかたくないと思うのであります。

それだけではありません。先の高野山大学の中野義照先生のお言葉でいえば、金子先生はいつのまにか、お東お西を越えて、全仏教界の中心的存在となっていかれた。かの鈴木大拙師とこの金子大栄先生のお二人は、現代の仏教界では別格で、真言宗であろうと、天台宗であろうと、禅宗であろうと、このお二方の存在は無視できないのだ、と、中野先生が言われたことを想い起こすことであります。

さて最後に、晩年の金子先生。その先生のお宅に、ときどきお参りさせていただきました。あるとき、お伺いしますと、先生が、いきなり厳粛なお顔をして仰せになりました。近ごろ、曾我先生のことを——ご恩をしきりに思うと、夢にもみると。曾我先生なしに自分はないと。そして、こうも仰せになりました。曾我先生は、躰全体で、自らにして佛法が語られていたと。しかるに、この金子は、まことに恥ずかしいことに仏教を説いてきたと。

このお言葉を承っておりまして、金子先生はなんという尊い方でおありなさるか、と、あらためて感じ入ったことでございます。じっさい最後まで、ただ曾我量深先生のご恩徳を謝して、自分の身を慚愧なされるお姿に深く深く感動したことでございます。

いよいよ、終りになりますが、さらにもう少し、ぜひ申し述べさせていただきたいことがございます。その一つは、金子先生の著作集には、あの問題となった『浄土の観念』が、先生のご意志によって載せられていないことであります。これは先生のご遺言でもあるとのことでございまして、たとえ一時的にせよ本山から問題にされ、お騒がせしたものを、載せるわけにはいかないと、こういう慎ましいお気持からであると承っています。今一つのことは、わたし

は学生時代、興法学園の方々には本当にお世話になりました。さっきは、安田さん、松原さんと申しましたが、お二人とも、私にとってはやはり善知識にてまします。金子先生の御年三十九歳のときの御著作『仏教概論』の結びに、先生は「有縁の善知識は皆な応現の仏陀である。」とお述べになっておりますが、私にとりましては、安田さんはやはり安田理深先生でおありでして、この二月が七回忌でありました。その安田先生のご在世中は、毎年のお正月の二日には、必ず金子先生のお宅に年賀に行かれました。今も想い起こします。あるときです。

「西元くん、君も金子先生のところ、いくんだろ、そうなら、わし一人で行くよりも、君と一緒にいったほうが気楽でよい」と。これにはいろんな事情がおありのようでした。あるとき、安田先生が言われました。「若いとき、京都に出てきて、ともかく真実の仏法を学びたいと志した。しかし金はない。飯(めし)を食うにも困る状態であった。それを見かねて、助けてくださったのが金子先生。原稿の清書やら、なんのかんのの名目で、生活費を出していただいた。それは金子先生が中心になって『仏座』という雑誌が出ていたころで、真宗学のことも、当初はすべて金子先生のご指導、そして先生のおかげで大谷大学の講義も聴けるようになった。ほんとうに先生のおかげで今日の自分はある。先生の御恩はなんとも言いつくせない。ところが宿業のいたすところ、君も知っているようなことで」と、しんみりとお話になられた。そんなことで、金子先生宅への年賀は、安田さんと私とは、時間を打合せて、いつもご一緒にお伺いするようになったことでありました。その安田先生も、そして金子先生も、曾我先生も、今やまさに倶会一処のお浄土。そして還相廻向のみ佛となって今ここに還来し給うていてくださることを仄かに感ずるものでございます。

金子大榮先生の十三回忌に際し、このように感話をさせていただけましたことをあつくお礼申して、この拙い話、終りにさせていただきます。有難うございました。

（本稿は昭和六十三年十月二十日、金子大榮先生十三回忌法要の記念講演に加筆・整理していただいたものである。）